

二 地獄の鬼か極樂の菩薩か

彼の有名な白隠禪師が、駿州原に居られた時の事。明德遠近に傳はり、織田平次郎信茂といふ人、尾州侯東勤の砌、列を脱して禪師の庵を訪ふたのであります。「私は好んで佛法を聞き、修行にも心がけて居るのであります。その内疑問は後返りして、最初に起つた地獄や極樂の事が、氣になつてなりませぬ。その有無が承はりたう存じます」斯様に申上げると、禪師は何に感じられたか、突然大喝一聲、「汝何者ぞ」と、意外の事に面食つた信茂、言下に「武士でございます」と叫んだら、禪師嘲笑ひながら、「何と申す、何！武士と申すか。汝若し武士ならば、武士の道を修むるがよい。君の爲に忠を盡し、事あらば一死以て是に當れば、足るでないか。然るに今この小奴子、徒に餘道に迷ふ。汝でも武士と云ふのか。若し武士ならば、山伏か野伏か。どうせ碌な者ではあるまい」

信茂この語に接し、最早腹は煮えかへるやうに堪らぬが、折角來たのだから、虫を殺して言を改め、「大善知識、よろしく御教を垂れ給へ」と請ふた。禪師は「ウンまだそんなことを云つて居る。こんな奴は山伏や野伏位なら、まだせめて人間の仲間だが、それにも及ばぬ、大方鯉ぶし位だらう」ときた。信茂もう堪まらない。覺えず腰のものに手をかけ、満面朱をそゝいで、額の筋はピリ／＼動く。「さうだ、鯉ぶしならまんだ臺所の用にも立つが、手前見たやうなものは、食ひつぶしであらう」。聞くや否や、信茂「己れ眞二つ」と刀の鞘を拂ひ、禪師目がけて切り付けましたが、禪師もさるもの、するりと身をかはして、二三間向で、お出でくといふ式、怒髪天をつき、心焦立たた信茂、堂上階下逃ぐる禪師を追ひかけましたが、あちらへ逃げ、こちらへ避けた禪師。不意に背後にふりむきて「あな恐しや地獄の鬼が來た」この一言

ねつ のぶしげ のうしん ひやみず 熱せる信茂の總身に冷水を浴びせかけられた如く、平身低頭、禪師の足下にお詫した。「あな有難しそれ極樂の菩薩が來た」と。斯様に教へられました。あゝ地獄の鬼は遠方に居るのではなかつた。地獄の世界は遙か彼方にあるのではなかつた。近く我身の内心の底に潜んで居るのであります。「かいらい師首にかけたる人形箱、鬼を出さうと佛出さうと」鬼も佛も心次第で兩方とも出せるが、さて主人公はどちらであらうか。お客は奇麗に飾つてゐて、主人は粗末な風をして居る。して見ると、如何でも鬼の方が主人らしいよ。人は一生涯かゝつても、子供一人得生ぬ者はあるが、その癖鬼は至つて能く、毎日毎夜に生んで居るらしい。平生生みためた鬼が、臨終の夕にはどやく顯はれて来て、我と我身をせめる。暮れた夜道は何となくお化が出さうな如く、現はれ來る鬼には、赤いのもあるであらう、青いのもあるであらう、黒いのもあるであらう、斑な鬼も居るであらう、友仙染の鬼も居るであらう、ひよつとすると、白粉つけて紅さして三味線さげた鬼も居るであらう。強ち鐵の棒さげたのばかりが鬼ではありませぬ。こんなのが、日にち毎日生れて來るのであります。